

<エッセイ>

多重化するアナロジー

浜田 明範*

2019年3月30日に一橋大学で行われた春日直樹先生（以下、親しみを込めて春日さんと呼ばせていただく）の最終講義は私にとっては衝撃だった。そこでは、呪術という人類学のだ真ん中で議論されてきたトピックを数学とのアナロジーで捉えることによって、何か新しい発想が生まれるのではないかということが示唆されたのだが、これは、そこで使われた言葉を借りるならば、器官覚と論覚で議論してきた人類学に数覚についての議論を加えることになるという。私にとってこの講義の内容が衝撃だったのは、（高校時代ですらほとんどまじめに数学を勉強していなかった私にとっては極めてハードルが高く）数学についての議論のプロセスはほとんどフォローできなかったのにも関わらず、数学とのアナロジーを用いることによって、個別的な事例と一般的な主張のあいだをつなぐ新しい（つまり、統計学を用いるものとは異なる）可能性が展開されうるように思えたからである。

春日さんが、あまりにラディカルな議論を展開するために、どうしてそういう話を始めたのかよく分からないというのは、多くの人が口を揃えるところである。同時に、何年か経ったときに、なるほどそういうことだったのかという納得が訪れるということも。今回も、春日さんが数学について議論し始めたという話を聞いて以来、どうしてそういうことになったのかと私はいぶかしんでいたのだが、ようやく（十分に理解できたとはとても言えないものの）数学とともに考えていくことの可能性を感じる事ができた。

私にとって、春日さんの展開する議論に後から感銘を受けるという経験はこれが初めてではない。2010年に一橋大学に赴任された春日さんは、その年の12月には、エドゥアルド・ヴィヴェイロス・デ・カストロ、アネマリー・モル、ヘオニック・クオン、キャスパール・ブルン・イェンセンを海外から招聘し、*The Human and the Social* というタイトルの国際シンポジウムを主催している。2019年の現在から見れば、このシンポジウムは、日本における人類学の存在論的転換（転回）の嚆矢と見なすことができる。しかし、当時の私は、率直に言って、そこで議論されていることの何がおもしろいのかを十分に理解することはできていなかった。

このシンポジウムに先立ち、一橋大学で開講されていた春日さんのゼミでは、モルの『多としての身体』[モル 2016]の原著を講読していたのだが、そこでも、物分りの悪い私は、その重要性をいまいち理解できていなかった。初回の授業で春日さんが発した言葉は

*関西大学社会学部社会学科

今でもよく覚えている。「今の医療人類学でこの本を無視して議論することはできないのだが……」。結局、私は博士論文を書いたときにも、「存在論的転換に正面から取り組んでいない」というコメントを春日さんからもらうことになる。私が、存在論的転換の重要性に明確に気づいたのは、(春日さんからの直接的・間接的な影響を受けながら)マリリン・ストラザーンやモルの翻訳を手掛けはじめてからであった。それはつまり、私が研究の拠点を一橋大学から移した後のことであった。その後の自分の研究活動を鑑みると、あの時、もっといろいろ聞けたのではないかという後悔の念が浮かんでくる。

一橋大学での春日さんについてもうひとつ思い浮かぶのは、比較的若い世代の研究者を集めて共同研究を行っていたことである。これも日本における存在論的転換の嚆矢のひとつとなった『現実批判の人類学』[春日(編) 2011]の草稿の読み合わせが一橋大学で行われたことがあり、私よりも少し上の世代の、今では日本の人類学を背負って立っているそうそうたるメンバーが顔を揃えていたことが思い出される。国際的なネットワークを持ちながら、若手の研究者をまとめて共同研究を組織する春日さんに、あるべき研究者の姿を見たのは私だけではないと思う。

このような経緯があったからだろうか。私にとって春日さんは、存在論的転換を日本に導入した先駆者であり、その更に先へと進んでいくトップランナーである。私は、春日さんはもちろん春日さんとともに議論を展開してきた自分よりも少し上の世代と比べても自分が周回遅れであることを自覚しながら、人類学の存在論的転換についての文献研究を行うことになった。

私の理解では、存在論的転換と呼ばれる潮流には、ストラザーンに代表されるアナロジーを研究対象としても研究方法としても重視する流れと、ブリュノ・ラトゥールやモルに代表される STS の影響を色濃く残す流れが混在している。この意味で、春日さんの最終講義も、2016 年に出版された編著『科学と文化をつなぐ：アナロジーという思考様式』[春日(編) 2016]も存在論的転換の日本における独自の発展の貴重な成果と評価することもできるだろう。

もちろん、春日さんは、単に存在論的転換の主要な要素を継承しているだけではない。最終講義の冒頭では、従来の STS の物足りない点として、科学者が何を楽しいと思いつながら研究しているのかが伝わってこないという趣旨のことを話されていた。春日さんが、私を含めた多くの聴衆が必ずしも議論についてこれられないことを承知の上で、繰り返し数学の議論を展開してきたのは、この課題に取り組むためだという。この「科学者が何をおもしろいと思っているかを知るために、彼女たちの書く論文に肉薄していく」という方向性は、間違いなく、春日さんが切り開こうとしている新しい地平だろう。もうひとつ、『科学と文化をつなぐ』では、存在論的転換の流れを人類学内部に限定することなく、自然科学者を含めた真に分野横断的な執筆陣がそれぞれにアナロジーについて検討するという取り組みがなされており、それによってアナロジーを重視する流れと科学を対象とする流れを

より強固に合流させることが試みられている。このような真に分野横断的な試みを実践することに伴う苦労は、私のような知力も胆力も半端なものには想像もできない。

「想像もできない」のは、私がそれに比肩すべき経験をしていないからであり、そのような機会からは積極的に逃げようとするであろうからだ。つまり、それがアナロジーを用いて私が理解することができる事柄の向こう側にある経験だからである。もちろん、これはアナロジーという思考様式の限界を示すものではなく、人類学者同士の共同研究を運営することにさえ四苦八苦してきた私には十分な精度のある橋渡しができないということである。ここから見えてくるのは、私たちがアナロジーを活用していくためにはターゲット・アナログをより精確にあるいはより新しい形で理解するために利用するためのベース・アナログのレパートリーの蓄積が不可欠であり、人類学者が生活を行い、フィールドワークをし、民族誌を書いたり読んだりしてきたのは、このレパートリーを増やすための方法としても理解できるということである¹。

ところで、春日さんは、数学の証明と制度のアナロジカルな分析 [春日 2013] や、メルパにおけるモカと賠償のアナロジーの分析 [春日 2016] において、アナロジーの双方向性と非対称性の共存について思考を巡らせているようだ。そこでは、アナロジーという思考様式そのものが数学の証明とのアナロジーで捉えられており、この文章の冒頭で紹介したような、数学と人類学のアナロジーを検討するという図式よりもさらに複雑な議論が展開されている。数学との関連で理解された（数学との）アナロジーを用いて、人類学の対象についての新たな理解を導こうとしているのだとすれば、ここでは、方法についての理解と対象についての理解がアナロジカルに混ざり合い、明確に区別できないようなポストブルーラルな地平が現れていると理解することができる。これが、アナロジーを研究対象としても研究方法としても重視するということである。

このような、対象の用いるアナロジーを方法としても活用していく方向性を継承していくとするのであれば、私たちは必ずしも今から数学を一から勉強しなくてもいいのかもしれない。数学とは別の科学の知見からアナロジーという思考様式を多重化していくこともまた、これから取り組まれるべき仕事と言えるだろう。私たちにとって幸いなのは、そのための第一歩が春日さんによってすでに用意されていることである。

¹ このような理解について、モルは次のように述べている。「ケーススタディはより広い関心に基づいているし、軌跡の一部になる。ケーススタディは、他の場所や状況のために、対比や比較や参照のためのポイントを提供する。他の場所で何を期待すべきかや何を行うべきかについては教えてはくれないが、適切な問いを提起してくれる。ケーススタディは、私たちの感覚を研ぎ澄ませます。まさに細心の注意を払って研究された事例の特異性によって、ある状況と他の状況で何が同じままで何が変化しているのかを解きほぐすことが可能になる」 [Mol 2008: 11] (訳文は田口陽子と筆者の共訳による)。

参照文献

春日 直樹 (編)

2011 『現実批判の人類学：新世代のエスノグラフィへ』 世界思想社。

2016 『科学と文化をつなぐ：アナロジーという思考様式』 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。

春日 直樹

2013 「数学の証明と制度の遂行：ケプラー方程式から出発する進化の考察」 河合香吏編『制度：人類社会の進化』 京都大学学術出版会、pp.287-307。

2016 「贈与と賠償：アナロジーの双方向性と非対称性」『科学と文化をつなぐ：アナロジーという思考様式』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、pp.177-193。

モル、アネマリー

2016 『多としての身体：医療実践における存在論』 浜田明範・田口陽子訳、水声社。

Mol, Annemarie

2008 *The Logic of Care: Health and the Problem of Patient Choice*. London: Routledge.